

# 森とともに 生きて



## 山里、天ヶ瀬の発生と風習

『ふるさと天ヶ瀬』著者 岩本速男

### 〈発生〉

天ヶ瀬の発生は、行者の支配権、霞の範囲から始まった。

「天ヶ瀬」とは、吉野郡上北山村を通る国道169号線から、行者環トンネルを通じて天川村に通じる国道309号線に入っている所にある。今は無人となっている集落（住民の多くは上北山村西原に移住）である。

この山里は、平安時代から続いていた笙の窟（大峰修験道の霊地75摩のうち、熊野本宮から数えて62番目の窟で、役行者を始め、名だたる行者が修行した霊地して有名）の山籠り行者への支援（食物など）や霊地の管理基地として、山伏が定住して発生した。宗教的行事を中心とした独特の風習を骨格として栄え、その歴史は1千年以上と考えられる。

江戸中期頃から三割程は共同所有の形態を続けていたが、元々は一支配権であった。

しかも、古文書によると三重県の海山町あたりまで支配し地頭を置き、近年まで地頭屋敷跡が存在したらしい。この支配権がいつ誰が決定したのか大きな謎である。はつきりしていることは修験道と笙の窟

### 〈話し言葉〉

私は言語のことはまるで素人で詳しくは述べられないが、思い出しながら少し書いてみる。

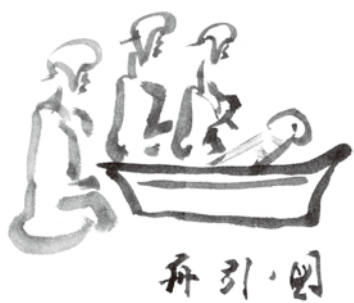
1945年頃の老人の言葉「どういうもんど」どんなことか、「あいてら」おまえたち、「おとろっしや」おそろしい、「おな」年下のものに使うおまえ、「いげ」女性のじぶんのこと、「おなご」女、「いおつり」魚釣り、「あめご」あまご、「きりくち」いな、基本的にはノイ、ノイラ言葉で、語り口調はゆっくりとしていた。しかし、発音は一般的ではなく、「ハシ」と言えば橋と箸が逆さま、「カワ」は川と皮になり、「アシ」は足と葦など発音による違いがたくさんあった。

私が高校に入学したのが1951年の春だったが、私が国語の本を読むと、同級生が一齐に笑い、囁きたるので教師も私も大変困り、読むのを中止したこともあった。

### 〈風習〉 結婚式の余興「船引」

天ヶ瀬の結婚式は、自宅の仏前で夫婦の誓いをご先祖様に向かって行い、これを両親と仲人が確認する。もちろん三三九度の盃事は行うが、披露宴が大変であった。日中から始まった披露宴は二の膳、三の

天ヶ瀬付近の風景



膳が出され夜中まで続く。宴たけなわの夜中、招待されなかった若衆が船引で押しかける余興がある。木製の小ぶりの舟に長さ50cm程の男根を形どった木を取り付け、最初は布が覆ってあり、さらに紐を取り付け上下に動く仕掛けもある。

土産を持参した旨、若衆の代表が口上を述べ、これを受け取るのは仲人が長老で、そのやりとりがなかなか面白い。最後は白布を少しづつずらし花嫁に見せびらかし、花嫁が恥ずかしがるのを肴に酒を飲む。そして、夜明けまで歌い踊る。

### 〈風習〉 夜這いの話

天ヶ瀬にも夜這いの風習があり、夜這いとは夜中に女の家に忍んで寝所へ忍び込む行為のことである。

老人から夜這いの苦労話をおもしろおかしく聞いたことがあった。対象となる女性には若い未婚者、後家などで、男性はもちろ

に基因することは確かだ、郷土史家の富山尚一先生の研究成果によると、平安時代に園城寺（三井寺ともいう。天台時門宗総本山）と源氏の関係が密になり、源頼家（988〜1075年）は深く園城寺の行観に帰依し、頼家の嗣子義家もこれに習ったという。しかも、笙の窟で最初に冬籠修行をした行尊は参議源基平の子で、行観は行尊の叔父であった。

寛喜4年（1232年）法印弁覚が勧進して源実朝の遺願により笙の窟に「銅造不動明王立像」をお祀りした。その間二百年以上の時空を経ている。

支配権ほどの時代に確立したか、今後の大きな研究課題である。支配者についても、鎌倉幕府勅命の者か、園城寺から任命された行者集団か、あるいは両方を兼ねた者が確定できていない。大峰の奥駆道は吉野から熊野まで約180kmもあり、源平の闘いで敗れた平家の残党は熊野から尾根伝いに奥駆道を北上し、峰筋から方々に逃げ延び各地に平家落人伝説を残しているが、天ヶ瀬の里にはそれらしき伝説はなかった。

しかし、当時のこのような背景から考えると、鎌倉幕府は平家残党監視を兼ねて拠点をつくった可能性もある。現に、天ヶ瀬の男衆は行者の修行も続けていたが、我等武門なりという誇りを持ち続けていたことも事実である。

ん独身の若衆。このことは密事であることから、自分の里から遠方の里に出掛けることが多かった。これには事前に段取りする。友人とか知人を通して、何となく予告か連絡を取り、女性もうすうす知っていたことが多い。親には内緒の秘事であり、たまに感づかれても大事にしなかったようだ。しつかりした家は、戸締まりもきつく、監視も行き届いていたから夜這いなど論外であったが、美しい娘を持ち、貧しい家などではむしろ、立派な若衆が来ることを期待した面もあったらしい。

若者は方々の祭りなどに出席、親しくなる事前行動は大事な所で、現在も昔も変わらない。天ヶ瀬から山を下り、川を渡り、峠を越え二時間以上も歩き、夜這いのあと夜明けまでに家に帰る、大変な苦労である。

夜這いの失敗談がまた面白い。暗い家の中で親父の頭につまみついて追い出された者、老婆の寝床に間違えて入ったとか、嘘か本当かおもしろい話があった。中でも深刻なのが、娘の腹が大きくなり、どの男の種かわからない場合、子どもがハイハイする頃、夜這いした男共が呼び集められ、車座をつくり中央に子供を這わせ、父親を決めたという。

大自然の素晴らしい山里に生きる若者は遊里もなく、異性については大変苦労したらしいが、男性的で、現在人も憧れそうな風情がある。